

長田国夫の『原爆ドーム』と『戦艦大和回想』

長田国夫は戦争や飢餓など、この世の悲惨さを直視した作品を多く描きました。そのひとつ、no.77《原爆ドーム》の裏面には、次のような作家の言葉が書かれています。

1983.11.24.

その日原爆ドームは泣いていた。

腕組んで歩いている若人よ

修旅で楽しそうに記念撮影している子達よ、

それは、あたり前のことではないのだよ。

今の平和があればこそ。

今の平和のお蔭なのだよ、

それを忘れるな、それを忘れるな。

この言葉によれば、長田が実際に見ているのは、若いカップルや修学旅行の生徒たちが楽しげに過ごしている1983（昭和58）年の原爆ドームです。しかし脳裏には、1945（昭和20）年8月の原爆投下直後の原爆ドームを見て、その凄惨な光景を描いているのです。少年時代から呉の海軍工廠に勤務し、広島の前原爆を身近に経験した画家として、平和への痛切な思いをこめて。

関連する作品として、彼は、詩人だった^{かずえ}一枝夫人の作品「戦艦大和回想」（長田一枝詩集『羽化』（1987年、地球社刊）収録）に寄せて版画を制作しています。

詩は、夫妻の故郷である呉で戦前に建造された戦艦「大和」をめぐる長大な作品です。安住の軍港の町で人々が楽しんでた、活気にみちた明るい生活。「不沈戦艦大和」が建造された時期にはじめてみた、明るい街の鉄柵の向うの現実。戦火。そして戦後40年経って茶の間のテレビに映った、九州はるか遠くの深い海底に横たわる大和の無惨な残骸。

版画は、一枝夫人の詩に触発され、その本質が凝縮されて生まれたイメージだと思います。



長田国夫《戦艦大和回想》